

[総合的な学習の時間]

小規模校・複式学級における総合的な学習の時間の評価の工夫

— 複式指導における同単元指導・同内容指導の実践から —

猪田 謙*

1 はじめに

平成23年度、小学校では新学習指導要領完全実施となり、小学校5・6年生は外国語活動（年間35時間）を行うことになった。¹⁾ それに伴い、総合的な学習の時間においては、年間70時間と削減された。このことについては、賛否両論があるであろうが、昨今の総合的な学習の時間のキーワードである「探究的・協同的な学習活動」「言語活動の充実」から、他教科等との関連を図ることで、総合的な学習の時間の充実が求められていると考える。

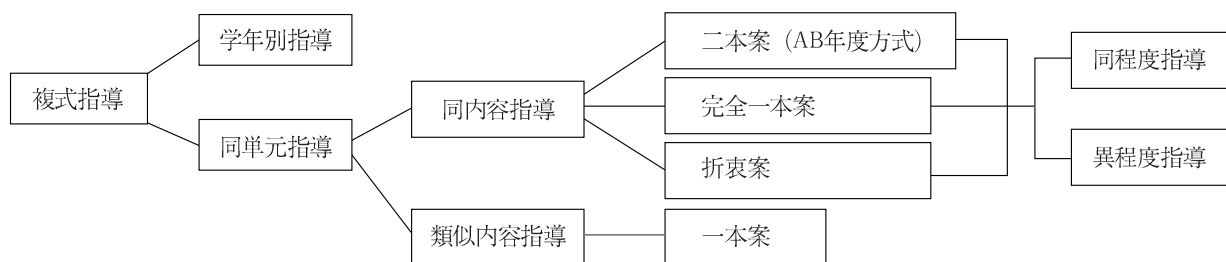
総合的な学習の時間が創設されてから14年ほどになるが、学校現場では実践や研究を積み、学校を取り巻く地域とのかかわりを柱にしながらかつ行錯誤を繰り返してきた。教科書がない中で、各学校の特色ある活動から「生きる力」をはぐくむために、活動内容を模索し、児童が対象とかかわりながら変容していく姿を追い求めてきた。こうした中で、評価の在り方についても各校に委ねられていた。

平成22年3月の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方（報告）」では、総合的な学習の時間の具体的な評価の在り方²⁾ について、「各学校が自ら設定した目標や内容を踏まえて観点を設定し、それに即して文章の記述による評価を行っており、新しい学習指導要領下でも現在の評価の在り方を維持することが適当である」とある。また、平成22年5月の初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」では、「総合的な学習の時間の記録については、この時間に行った学習活動及び各学校が自ら定めた評価の観点を記入した上で、それらの観点のうち、児童の学習状況に顕著な事項がある場合などにその特徴を記入する等、児童にどのような力が付いたかを文章で記述する」としている。これらを受けて、平成23年7月に「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料」³⁾ が国立教育政策研究所から示された。

T小学校は全校38名、5・6年生は複式学級で編成されている。豪雪地帯であるものの、信濃川の河岸段丘をはじめ、山々に囲まれた自然が豊かな地域である。総合的な学習の時間を通して、地域とかかわりながら、地域のよさを実感し、力強く生きていこうとする児童の姿を期待している。

2 研究のねらいと複式指導

複式学級における指導については、一般的な類型として、以下のようなものが挙げられる。



一つの教室内で複数の学年がそれぞれの学年の学習を進めるのが学年別指導である。これは、子どもへの個別対応や教師の教材研究や準備が困難である。T小学校では、町の教育委員会から複式解消講師を派遣してもらっているため、国語科や算数科については、1学年につき、教師1人が付き、別教室で学習を進めているため、複式指導が解消されている。その他の教科については、同単元・同内容指導の二本案（A・B年度方式）で進めている。

複式学級での総合的な学習の時間における先行実践研究では、複式学年で一律である同単元指導—同内容指導—完全一本案または折衷案の同程度指導が展開されていることが多い。⁴⁾⁵⁾ 藍澤 (2010)⁵⁾ は、極小規模校における総合的な学習の時間における3年間で

* 津南町立外丸小学校

1サークルの実践報告をしているが、各学年の評価の在り方については述べていない。また、本校におけるこれまでの総合的な学習の時間の実践を見ても、同程度指導であり、異学年児童の学びについて、評価規準が同じであった。つまり、複式学級をはじめとした異学年児童が混在する総合的な学習の時間において、子どもの学びを保障するために指導計画を工夫することまでは実践されているが、その労力から、評価の工夫まで及んでいないことが考えられる。

そこで、本研究では、1年次は、複式学級において、同単元指導－同内容指導－同程度指導として、年間を通じて2学年とも同じテーマ、活動内容、評価規準の設定をして活動を展開する。2年次では、同単元指導・同内容指導－異程度指導として、各学年の評価規準に違いをもたせ、異学年児童の学びの違いを発達特性としてとらえる。このことで、複式学級における総合的な学習の時間の評価の工夫について明らかにしていく。

3 研究の実際

1年次「津南町に生きる」と2年次「みちを歩む」についての実践から省察する。なお、1年次と2年次の活動テーマや活動内容が異なるのは、複式指導の同単元指導・同内容指導であり、1年次5年生と2年次6年生の活動が重複しないためである。

(1) 1年次の年間活動テーマと評価規準

○1年次活動のテーマ「津南町に生きる」

4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
津南町のよさを見付けよう (25) ○津南町のよさについて知る。 ・津南町のイメージマップを作る。 ・地域の人々や観光客などにインタビューやアンケートをする。 (インタビューやアンケートの計画準備) ○津南町に生きる人の話を聞く。 ・津南町の一員として努力している人々と出会い、話を聞くことで、津南町のよさや課題を知る。				津南町のよさをまとめよう (25) ○津南町のよさを調べてまとめる。 ・地域の人々や観光客などにインタビューやアンケートをした結果をまとめる。 ○津南町に関する追求活動をする。 ・津南町に関する人々の思いや願いをもとにさらに調べたいことについて追求テーマをもって調べる。 ○他から見た津南町のよさを知る。 ・新潟市に出かけ、津南町のPRをするとともに、津南町についての印象やよさをインタビューする。				これからの津南町の未来について提言をしよう (20) ○津南町のよさについてまとめことを提言としてまとめて発信する。 ・津南町のよさを生かした提言内容を考え、効果的な発信をする。 ○津南町に対する思いや願いをまとめる。 ・ふるさと津南町に生きる一員として自分にできることを考える。		

〈評価規準〉 (1年次：同単元指導－同内容指導－同程度指導) ○進んで津南町に関するもの・こと・人とかかかわるとともに、活動を自分たちの手で創り出していこうとする。 ○自分なりの問題を見付け、その解決方法を見だし、進んで考えたり解決したりする。 ○調べ活動やインタビューやアンケートから得た情報や気付いたことを分類・整理し、発信へとまとめていく。 ○津南町の人々とかかわったり、津南町の未来に対する提言をまとめたりすることで、ふるさと津南町での生き方や自分ができることについて考える。	【主体的な学習態度】 【問題解決能力】 【情報活用能力】 【共生的な態度】 【自己の生き方を考える】
---	---

(2) 1年次の実践結果

高学年ということから、地域の人々や数多く訪れる観光客から改めて津南町のよさをインタビューやアンケートから収集する活動を設定した。アンケート箱を設置した場所は、JR津南駅、温泉旅館、郵便局、JAバンク、津南病院、津南町役場、津南町図書館である。児童はアンケートにより、よさを知りたいのであるが、同時に、過疎化と高齢化が進む津南町の実態を現実的にとらえることになる。

このような意図から、アンケート設置場所については教師側から提案した。アンケート用紙の作成やアンケートへの協力をお願い、定期的なアンケートの回収、アンケート結果の集計などは児童が話し合い、協力しながら進めた。回答が増えるたびに児童の活動意欲は高まり、「もっと実際に直接話を聞いてみたい」という願いから、津南町内にあるコンビニエンスストアやスーパーマーケットなど、グループに分かれてインタビュー活動を行った。その項目には、津南町のよさばかりでなく、津南町の問題や津南町に対する要望が盛り込まれた。



11月には、新潟市へ出向き、津南町のPRパンフレットを片手に津南町の印象やよさについてインタビューを行った。はじめは、あまりに多い人通りとすれ違っても挨拶をしない人々、声をかけても無言で通り過ぎていく人々などに困惑していたが、時間が経つにつれて慣れてきたため、目標人数であるパンフレット数の200人を達成した。

「協同的な活動」を意識し、常に5・6年生と一緒にインタビューしたり、アンケートの回答を整理したり、話し合ったりしてきたのであるが、常に6年生が5年生をリードしながら活動を進めていく姿が見られた。また、活動のたびに振り返り作文を書きためるのであるが、6年生と5年生では、気付きの質やとらえ方が明らかに違う様子が見られた。

〈5年生N夫〉

今日は津南病院のアンケートを回収してきました。12枚のアンケートが入っていてうれしかったです。Kさん（6年生）が津南町は水がきれいで、おいしいため、おいしい米が作られることが津南町のよさだと言っていました。ほくもそのとおりだと思います。もっと津南町のよさを知りたいです。

〈6年生K夫〉

アンケートを集計していて、やはり「水と米がおいしい」という意見が多かった。ほくも津南町のよさは豊かな自然とおいしい米だと思う。しかし、気になる答えもあった。それは若者が減っていて津南町の将来が不安だというのだ。せっかくおいしい水があっても、おいしい米を作る人が少なくなってしまうのは津南町のよさがなくなってしまう。どうにかしなきゃいけない問題だと思う。

次の回収日に5年生と6年生を分けてアンケート結果を整理・分析する話し合いの場を設定した。6年生はかなり盛り上がった話し合いをしていたものの、5年生は沈黙が続いたり、6年生の方をただ見ていたりする様子が見られた。

6年生が5年生をリードすることは自然な形ではあるものの、5年生が6年生に言われるままに活動したり、気付きや考えを生むことを6年生に頼りきったりしてしまえば、5年生に学習活動が成立しない可能性が出てくる。また、振り返り作文からも、アンケート結果について自分事としてとらえているか否かの差が見られた。これは、まさしく同内容指導→同程度指導による負の部分であると考える。わずか1年の差ではあるが、学習経験差、発達特性の違いについてまざまざと感じる結果となった。

1月下旬に入り、これまで集めてきたアンケートやインタビュー結果を集計し、1年間の活動をまとめる場を設定した。ここでは、小学校卒業が見えてきた6年生と5年生では違う内容でまとめるようにした。発達特性の違いや活動時期における児童の心理を考慮したためである。6年生は、「将来の自分と津南町」について、これまでの多くの人々の回答をもとに作文を書き、地元の新聞社に投稿することにした。5年生は、集約した結果をグラフに表し、考察をもとに「津南町への提言」として、ポスターを作って津南町役場に掲示をしてもらうようにした。

〈6年生R子〉

私は1年間総合の学習をしてきてよかったと思うことは、津南町のアンケートやインタビューでたくさんの人とふれ合えたことです。春からずっと今までやってきた学習なのですごく達成感があります。本当は老人施設や、津南町アンケートを設置させていただいたいろいろな場所に結果を発表する予定でしたが、地震のため発表することができなくなってしまいました。

アンケートの中には、「雪にも負けないしんぼう強さ」「近所の人が温かい」という意見がありました。この地震で私の家も被害を受けましたが、雪にも負けないという精神で地域の人が助け合っている姿を見て感動しました。その時の光景は都会とかだったら見られないんだろうなと思いました。地震が起きたときは考えることはできなかったけれど、1日経ってみて「津南町ってすごいな、いいところだな」と思いました。これは、これまで総合の学習をしていたから気付いたことだと思います。私はこんなすてきな津南町を大切にしたいし、大人になっても私たちが津南町を守っていきたいと思います。

今まで津南町アンケートやインタビューにご協力くださった多くの人々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

〈津南町への提言〉（5年生）

☆観光地の案内役に小・中学生が協力する。そのことで、小・中学生がふるさと津南町のよさを改めて実感することができるし、将来も津南町に住みたいと考える人が増える。また、働ける場所を増やす。そうすれば、将来津南町に住みたいと考える人が増える。

☆自然をもっと身近に感じられるように、山や川の近くに観光に来た人が歩ける道を作る。津南の自然を感じるができるだけでなく、自然を大切にしようとする人が増えると思う。

☆まずはお年寄りの人たちが安全で、安心して暮らせるところを増やしていく。そうすることで、将来津南町に住みたいと考える人が増える。

5年生は6年生と活動を別にしたことで、自分たちでやり遂げなければならないという自覚をもって活動を進めようとする姿が見られた。時々、6年生に相談をするために話を聞いていたものの、膨大なデータをまとめ、提言としてまとめることができた。

〈5年生N夫〉

ほくたちは今まで回収したアンケート結果やインタビューで聞いたことをグラフにまとめました。6年生の意見を提言の中にどう入れようかとみんなで考えているうちに、6年生が考えていることも分かるような気がしました。量が多くて大変だったけれど、5年生のみみんな協力し、津南町役場に掲示してもらえることになりました。6年生からもがんばったねと言われてうれしかったです。

このように、活動終盤の活動内容に違いをもたせることで、評価規準の【自己の生き方を考える】という項目において、それぞれの学年で違いはあるものの、児童の学びが成立したと考える。

(3) 2年次の年間活動テーマと評価規準

○2年次活動テーマ「みちを歩む」

2年次は11人の5年生が進級し、6年生7人と合わせて18人の複式学級となった。「みち」とは、実際に「道」を歩く、「未知」の体験をする、そして「人生の道」を考えるという思いを込めて活動計画を立てた。道に対する自分なりの考えをもつためには実際に自分の体を使って道を歩き、諸感覚を活用しながらじっくりと対象にかかわる必要があると考えた。

また、2年次の活動内容は2学年とも同じ活動をしながらも、全員で1つの考えにまとめたり、目標を達成したりするのではなく、対象に対する自分なりの考えを重視し、発達特性によって気付きや考えが違っていてもよいという活動内容とした。2年次は、2年に1度の宿泊体験学習があり、総合的な学習の時間と関連させた内容にした。神奈川県箱根市の旧街道石畳の道、埼玉県の川越市の町並み、東京都のレインボーブリッジやお台場といった時代を追った道を歩いた。

4月	5月	6月	7月	8・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
<p>〈道を歩く〉～「道との対話」～ (25)</p> <p>○いろいろな道を歩き、道に対する多様な気付きや思いをためていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校周辺の道 ・自然が豊かな道 ・津南町内の道 ・車でしか通ったことがない道 <p>○さまざまな歩き方をして、道に対する多様な気付きや思いをためていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達と楽しく歩く ・一人で黙って歩く ・目隠しして歩く ・のんびり歩く ・道端や景観に着目して歩く <p>○歩きたい道や歩きたい歩き方を自分なりに考えて歩く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味をもった道を歩く ・もう一度別な歩き方で同じ道を歩く ・歩いたときに感じたことや考えたことについてこれまでの活動と比較する。 			<p>〈みちに歩み寄り〉～「人との対話」～ (25)</p> <p>○自分が興味をもったことについて追求し、道にかかわる自分の考えを広げる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・道の歴史や由来 ・道端の緑、景観 ・道の便利さ、不便さ、大切さ <p>○ロングウォークを体験することで、道を歩きながら、自分を深く見つめるとともに、仲間と共に歩む喜びを知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長い時間一歩一歩前に進むことで気付く ・仲間と共に励まし合いながら歩く ・歩き終えた達成感や成就感を味わう <p>○宿泊体験学習で、県外の特徴的な道を歩き、見聞を広めるとともに、今まで歩いてきた道と比較し気付きや思いを深める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昔ながらの道、歴史ある道 ・新しい道、夢の道 ・道づくりにかかわる人や自分の道を歩んできた人との出会い 			<p>〈みちを歩む〉～「自分との対話」～ (20)</p> <p>○雪道を歩く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・雪道の大変さや除雪にかかわる人々の苦労や工夫を知る ・道を切り拓く <p>○これまでの活動や自分を振り返る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで道を歩いてきたこと ・これまで人生を歩んできたこと、小学校5・6年間成長してきたこと ・これからの人生を歩んでいくこと ・人と共に歩んできたこと ・人の生き方で学んだこと <p>○自分のこれからの歩みを考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の将来、夢 ・人と共に歩んでいく <p>○文集等で発信する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の気付きや思い、考えを表出、発信する 				

<p>〈評価規準〉(2年次：同単元指導－同内容指導－異程度指導)</p> <p>○いろいろな道を歩いたり、様々な歩き方をしたりして感じたことや考えたことから、道に対する自分なりの問題を見いだす。 【課題を見付ける力】</p> <p>○歩いてきた道や道の歩き方について、気付いたことや考えたことから、自分なりの解決方法を探りながら活動する。 【追求する力】</p> <p>○道や自分の生きる道について追求することで得た気付きや考えをまとめ、他者に分かりやすく工夫して伝える。 【6年生：表現する力】</p> <p>○道について追求することで得た気付きや考えをまとめ、他者に分かりやすく工夫して伝える。 【5年生：表現する力】</p> <p>○自分の活動を振り返り、「みち」や自分の変容について多面的に見つめるとともに、これからの<u>自分の生き方や在り方</u>について考える。 【6年生：振り返る力】</p> <p>○自分の活動を振り返り、「みち」や自分の変容について多面的に見つめるとともに、これからの<u>道や道に対する自分の在り方</u>について考える。 【5年生：振り返る力】</p>
--

なお、評価規準の観点に関しては、中央教育審議会による通知をもとに、1年次の各学年の実践をもとに全職員で見直しを図った。6年生と5年生では、下線部のように評価規準に違いをもたせた。これは、活動内容は同じものの、同内容指導－異程度指導とし、各学年の発達特性を考慮した評価規準である。6年生は小学校を卒業し、人生の1つの節目を迎えることとなるため、「自分の生きる道」「自分の生き方」を意識してほしいと考えた。5年生は、まずは対象である道と存分にかかわり、「道と自分」について考えられるようにしたいと考えた。その中で、「自分の生きる道」や「自分の生き方」について考えが及ぶようであればよいというように

した。

(4) 2年次の実践結果

活動当初は、「1年間で100km歩く」という目標を立て、「道を歩く」という同じテーマ・同じ活動内容のもと、学校周辺から津南町の各所を一緒に道を歩きながら、ごく自然に自分の気付きや思いを交流し合っていた。津南町の豊かな自然を眺めながらよさを再認識したり、登下校で何気なく歩いている道でもよく見ながら歩くと多くの発見があることに気付いたりする姿が見られた。限られた時間の中でも諸感覚を活用しながらの体験活動を保障することが、これらの気付きにつながったと考える。

総距離で30kmほど歩き、多くの気付きや疑問をもったところで、5・6年生混成の小グループに分かれて道に対する意見交流を行った。これまで道を歩き、活動のたびに書きためてきた作文シートを振り返りながら整理することで、自分なりの道に対する視点やこだわりを明らかにするためである。また、他の友達の道に対する思いや願いを聞くことで、道に対して多面的にとらえ、事後の活動に活かしてほしいと考えたためである。

これまで道を歩いてきて考えたことや道に対する思いや願いを付箋に書き、それぞれが小グループの中で発表し、「道のよいところ」と「これからの道の課題」、「今までの道」と「これからの道」というマトリックスを用いてKJ法で分類した。

その後、意見交流活動の振り返り作文を書く場を設定した。

〈6年生M子〉

私はアスファルトでできた道は歩きやすいけれど、土手の道もジャリ道も周りに自然があり、それなりのよさがあると思います。歩きやすい道もいいのですが、歩みにくい道を歩くことでそのよさが分かるし、人生も歩きやすい道ばかりではないと思うからです。これから私は道を歩きながら、その道はどうしてできたのかについて考えながら歩いてみたいです。

〈5年生S夫〉

ぼくは今まで学校に来るときや帰るときなど、何となく道を歩いていたけど、道を歩き始めてから周りをよく見ながら歩くことでいろんな発見をすることができるようになりました。また、同じ道でも車に乗っていると気付かないことでも、実際歩いてみると多くの発見をすることができます。これからももっといろんな道を歩いてみたいです。

10月には、「もっと長い距離を歩いてみたい」という児童の願いから、「ロングウォーク」を実施した。十日町市の笹山陸上競技場から学校までの約22kmを1日かけて歩いた。スタート時は元気であったものの、歩く距離が増すにつれて次第に言葉が少なくなっていた。後半は互いに励まし合い、声をかけ合うことで、全員が歩ききることができた。この活動の振り返り作文の内容も6年生と5年生では大きな違いが見られた。

〈6年生Y夫〉

10kmをすぎたところから、足が痛くなって正直ゴールできるかどうか不安になりました。でも、みんなが声をかけてくれたので何とか歩ききることができました。一人では絶対に歩ききることができなかつたと思います。学校前の上り坂がきつかったけれど、その後下り坂があるとあってがんばりました。つらいことでもがんばれば、その後いいことが待っていると思い、まるでこれは人生と同じように感じました。これからぼくは何事にもがんばって挑戦していきたいと思いました。

〈5年生H夫〉

ぼくははじめゴールできるかどうか不安だったけれど、けっこう余裕でゴールできました。十日町の商店街は一度みんなで歩いたことがあるし、ゴール前の学校の近くの道も何回も歩いているし、今まで歩いてきたことに自信をもって歩くことが楽しく歩けるコツだと思いました。今度はもっと長い道を歩くか、昔の人が歩いていた道とかを歩いてみたいです。

これらの振り返り作文から、5年生は対象である道に対して興味や関心を広げ、自分と道について関連付けようとしている。6年生は対象である道に興味や関心を広げつつ、自分の生きる道について関連させながら言及している。両者とも、評価規準【振り返る力】について、各学年相応の学びが成立していると考えられる。

5 研究の成果と考察

(1) 総合的な学習の時間の単元指導一同内容指導における同程度指導と異程度指導の違いについて

1年次、2年次との違いについて、児童が書きためてきた振り返り作文の記述や自己評価から、以下のように子どもの学びを見取った。活動の節目時には必ず振り返り作文を書く場を保障するとともに、対応する資質・能力についての自己評価を行うようにした。

表1 1年次同程度指導における教師の見取りと児童の自己評価〈6年生6人, 5年生7人〉

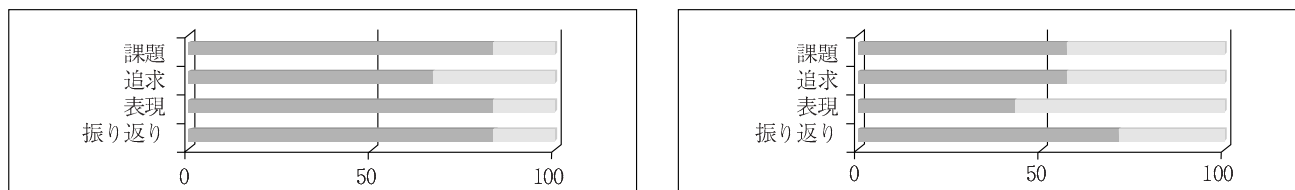
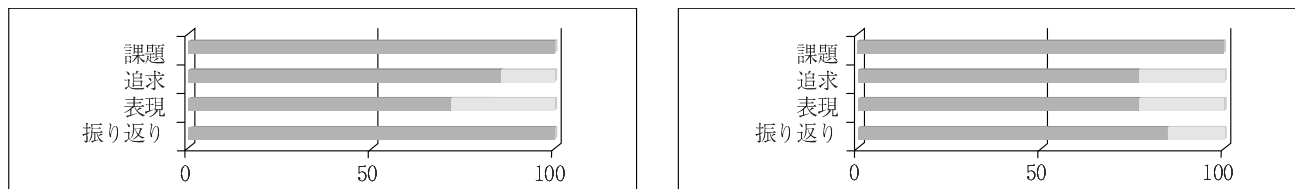


表2 2年次異程度指導における教師の見取りと児童の自己評価〈6年生7人, 5年生11人〉



- ・棒状グラフの濃い部分は評価規準の到達率
- ・課題：課題を見付ける力 追求：追究する力 表現：表現する力 振り返り：振り返る力

表1のように、1年次の同程度指導では、すべての評価規準項目において、6年生が5年生を上回った。5年生の振り返りの数値が他の項目より上回ったのは、最終段階の活動で5、6年別に活動を設定したため、対象に対する自分の在り方についての記述が多く見られたためであると考えられる。同程度指導では、一律の評価規準を設定したために、発達特性の違いについて配慮できず、同学年の個人差という見取り方になってしまったと反省している。

表2の2年次の異程度指導では、「みちを歩く」という活動テーマの内容から、諸感覚を活用した活動であったため、課題を見いだす力が全員評価規準に到達した。また、5年生においては、発達特性を考慮した6年生と違う評価規準を設定した表現する力、振り返る力についての到達率が1年次より上回った。

これらの結果から、同単元指導であっても、複式学級における総合的な学習の時間において、異程度指導の評価規準を設定することが有効であると考えられる。また、同内容指導であっても、児童の実態に応じて、発達特性を考慮した活動構想をする必要があると考える。

また、同単元指導における同程度指導と異程度指導の両方を実践してみて、5年生と6年生の発達特性の違いを以下のようにまとめる。

- ・5年生は対象に対して興味や関心を広げながら、対象に対する気付きをためていく。対象に寄り添う中で、対象に対する自分を見つめたり、自分の変容をとらえたりし、対象に対する自分の在り方を考えられるようになる。
- ・6年生は5年生までの学びをもとに、小学校卒業という節目を迎えようとする中で、対象を通して学んできたことを他にも生かそうとしたり、対象を介して将来の自分を考えたりするようになる。

6 今後の課題

小規模校、特に複式学級を編成する学校では、総合的な学習の時間の活動内容があらかじめ決まっていたり、毎年繰り返されることで、マンネリ化したりしているという声をよく聞く。しかし、小規模校は年度によっては人数が大きく変動する可能性がある。したがって、目の前の児童の実態や発達特性に寄り添った活動構想や評価規準を考えていきたいものである。

3年次は同じく5・6年生の複式学級で「生きるための食」というテーマで活動を進めている。畑や田で作物を育て、収穫し、得た「食」をどのように生かすかについて考えている。異程度指導の考えをもとに、5・6年生で違う評価規準を設定し、児童が対象である「食」とどう向き合うかについてこの研究成果をより明確にしていきたい。

〈引用文献〉

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」 2008年
- 2) 文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」 2012年
- 3) 国立教育政策研究所「総合的な学習の時間における 評価方法等の工夫改善のための参考資料」 2012年
- 4) 北海道士別市立中士別小学校研究図書「複式教育の手引き（基礎編その1・その2）」 2007年
- 5) 全国へき地教育研究連盟「これだけは知っておきたいへき地教育ガイドブック」 1995年
- 6) 藍澤 晋「小規模校の長所を生かした総合的な学習」 2010年